



山陽スピリット ニュース



2016(平成28)年4月1日

学校法人 山陽学園

広報・山陽スピリット推進室 発行

山陽学園、 もうすぐ130歳！

新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます。そして、新しい生活を迎えた皆さま、創立130周年を迎える節目に共に山陽学園に集えたご縁を嬉しく思っております。

130年前、岡山に女子教育を根付かせたいと情熱を持った人々がいました。現代に生きる私たちには想像も出来ないことですが、当時は「女子に教育必要なし」といわれた時代でした。世間から理解されない、もちろん資金もない…そんな状況からどのようにして山陽学園は出来たのでしょうか。

教師と校舎を確保せよ！

130年前の1886(明治19)年7月17日、夜の武家屋敷に集う人々がおりました。その夜、岡山に女学校を設立するため数十名が話し合いをしていました。英語を主とした教育内容が難しすぎるという者、財政面の安定を最優先に考える者、さまざまな意見が飛び交います。誰もが決断出来ずにいましたが「今、最も大事な事は、教師と校舎を確保する事です」と大西絹(当時29歳)が強く主張しました。この言葉を受けて、女学校設立へと動き始めます。

最も大事とされた教師と校舎の問題ですが、教師は西山小寿(にしやま こひさ)という22歳の女性が引き受けて、校舎は小原俊治という21歳の男性が武家屋敷の家賃を負担することになりました。

この話し合いの9日後には山陽英和女学校として生徒募集の広告を新聞に掲載しています。10月18日には入学試験、11月1日には開校式、話し合いから半年という驚くべきスピードで学校設立に至るのです。

開校の日、33人の生徒は畳の上に並べられた椅子に座り、緊張して開校式が始まるのを待っていました。鐘が鳴ると西山小寿がやって来て最前列に座りましたが、しばらくすると立ち上がり「石黒様がおいでになるはずではありませんが、お見えになりませんから、始めましょう」と言いました。この「石黒様」とは、創立者の一人である石黒涵一郎(当時32歳)のことです。弁護士をしていた石黒はこの日、条約改正に関わる裁判の真っ最中でした。

それぞれの立場で考え、精一杯出来ることに力を尽くす。一人ひとりの情熱が集まって山陽学園はスタートしたのです。

当時の世の中は男女の生き方に大きな差がありましたが、山陽学園を立ち上げた人々には「男女は車の両輪、翼の両翼である」という志がありました。これは男女が同じように教育を受け、同じように自らの力で考えなければ、より良い社会にはならないということです。ひと組の男女を一对の車輪や翼に例えて、同じ大きさとなってはじめて真っ直ぐ前進するということを表しています。男性だけが優位な立場でなく、女性だけが特別待遇されることなく、男女ともに活躍できる社会を目指しています。

130年も前から山陽学園は男女ともに手を携えて、それぞれの特性を生かし、人間として大きく成長することを目標としていたのです。

身になる学びを得るために

大西絹の言葉は言い換えれば「教師と校舎があれば学びは始められる」ということです。これは生徒や学生の立場から考えると、学びたいという意欲さえあれば勉強は始められるということです。最新の設備、きれいな校舎、ステキな文房具・・・「もっと」を望めばキリがありません。時には他の人とくらべて、勉強する気にならないのは十分に与えられていないせいだ、と思うこともあるかもしれません。

そんな時はちょっと立ち止まって考えてみてください。最新の設備がない昔の人々はどうかやって勉強していたのでしょうか。世界にはボロボロの建物で、鉛筆もノートもなしで勉強している人もいます。

まず与えられた目の前の課題を自分自身で工夫しながら精一杯やってみてください。勉強することに苦勞し、自らの頭で考えた人が本当の意味で身になる学びを得られるはずです。

歌い継がれる



「学びしみさを 洗いし心」

山陽学園の校歌・学園歌は1898(明治31)年頃制定されたといわれ、110年以上も歌われています。全国でも学校名が入らない、美しい旋律の二部合唱の学校歌は珍しいものです。

歌詞の1番2番では春夏秋冬の季節をめぐり、操山と旭川を称えています。3番の歌詞に登場する「学びしみさを」とは、1番の歌詞の「操の山のときわの松の 心をこそはわれ学ばまし」という部分を示しています。つまり、操山の松が永遠に変わらないように私たちもその心を学びましょうという意味で、学び続ける姿勢を表しています。例えば、何気ない日常を非凡にする努力、目標を見失わないようにする決意、目の前のことに力を尽くす、今日できることからすぐに取り掛かるということです。

「洗いしころ」は2番の歌詞の「旭の川の

清き流れに 心をこそはわれ洗わまし」という部分を示し、旭川の清らかな流れのように私たちもその心を洗いましょうという意味です。これは人として生きる心構えを美しく保つということで、人を羨ましがったり、悪口を言ったり、また傲慢になったりする心を自分でおさめる努力をする、ということです。例えば、人に対して「〇〇してやったのに」という気持ちが強いと、誰かに親切にされても「ありがとう」と言うのを忘れてしまうかもしれません。

それでは、私たちは一体誰のために「学び」「洗う」のでしょうか。歌詞の3番には「自分自身のためではない この広い世の中のため、人のために捧げましょう その他にありましようか」と続いています。

人の役に立つためには、自分の信念をつらぬき通す意志と何事にも動じない心がなければなりません。自分の選択に責任を持ち、やり抜く強さが必要なのです。それと同時にまわりの人への思いやりを忘れてはいけません。とても難しいことですが、山陽学園に学ぶ皆さんが日々勉強に勤しみ、多くの人から必要とされる人間へと成長することを願っています。



校歌・学園歌

宇野光三郎 作歌

- | | | |
|---|--|--------------------------------------|
| 1 | のどけき春の
しづけき秋の
操の山の
心をこそは | 花のあしたも
月のゆうべも
ときわの松の
われ学ばまし |
| 2 | 照る日もあつき
雪降りしきる
旭の川の
心をこそは | 夏のまひるも
冬のよわにも
清き流れに
われ洗わまし |
| 3 | 学びしみさを
わが身の栄えの
ひろく世の為
ささげまつろう | 洗いしころ
為にはあらず
はらからのため
外やあるべき |